

第4回厚別区防犯ネットワーク会議 会議録

1 日時・会場

平成24年11月26日(月) 14:00~15:30

厚別区役所2階C会議室

2 出席者(敬称略)

善養司 圭子(北海道家庭生活総合カウンセリングセンター)

善養寺 亮(同上)

倉賀野高行(小学校長会厚別支部)

齊藤 敏子(厚別中学校長会)

東 更司(もみじ台まちづくり会議)

山野 正幸(北海道コココーラボトリング㈱)

吉田 貴彦(同上)

鎌倉 秀幸(厚別区青少年育成委員会)

押田 純(森林公園町内会)

真木 秀雄(わかば町内会)

木谷 裕(厚別中央まちづくり会議)

新谷 拓朗(厚別区東地区民児童協会)

牧野 弘志(厚別南まちづくり会議)

手塚 純子(厚別区PTA連合会)

和田 政男(厚別警察署生活安全課)

小野 征彌(厚別区子ども会連合会)

松浦 宏(厚別区土木部維持管理課)

志賀 弘朗 厚別区市民部総務企画課長

河井 力 厚別区市民部総務企画課地域安全担当係長

後藤 淳 厚別区市民部地域振興課まちづくり調整担当

3 会議内容

(1) 犯罪被害者支援とは何か

一善養寺 圭子氏により防犯研修会での講演の概要を紹介していただいた。

- ・平成9年から相談室を開設して15年間、被害者の声を聴き、支えるとは何かを考えてきた。以前、被害に合った人はPTSDに係ると考えられていたが、震災後は10人中7,8人は自力で回復しており、残り2,3人が医師による治療が必要であることがわかっている。また、残り7人は被害にさいなまれながらも工夫して被害と

一緒に生きているのである。

- また、2次被害というものがあり、メディアや学校、職場のほか、医師が良かれと思って行う事がマッチせずおこる場合があり、予期できず大変という現状がある。これに対しては、特に支援が必要であり、PTSDに対する理解や価値観の押しつけを避け、聞く側に回り、被害者の言葉に耳を傾けることが必要である。そのため、「頑張れ」とか「忘れなさい」という言葉はNGである。苦しみを共有し、一緒に佇むことが大事。
- 2次被害は家族の中から受けることもあり、1つの被害によって、家族の中からとげとげした雰囲気が出ることもある。子供が被害を受けたとき、親の介入にあたって必要なことは、大事なことは決めないということであり、以前と同じような考え方ができるようになって初めて行うべきである。
- このような被害を受けた者同士の気持ちを分かち合うものとして、自助グループというものがあり、同じ立場同士により話を聞いてくれる安心感を得ることができる長所がある半面、その話の中から程度の差を知ることによって「あなたはまだいい方でしょう」という考え方から2次被害をこうむることもあるため、結成は難しい。そのため、被害者相談室を設けており、相談や支援、広報啓発などの活動を行っている。

—お話しを受けて

- 警察では、小学校に乱入して生徒を襲う事件があつてから2次被害の影響を防止する取り組みを検討するようになったが、十分とは言えない現状がある。被害者の心情を害する聴取を避けなければならないことのほか、事情聴取の立ち合いを担当する婦警等が参ってしまうことがある。
- 中学校でも警察に来てもらい防犯教室をするようになった。
- 心の悩みについて考えなければならないようになったところであるが、心に傷を負った子供にどうやって配慮すればいいだろうか。
- 極端にやさしくというのは良くない。子どもが今まで通り学校に通える雰囲気作りに努めてほしいと思う。普通に、自然にが鉄則である。
- 大きな事件ではないが、不審者情報で良くあるような変質者が出たという噂を聞いた子どもに対し、大人としてできる対応はないだろうか。
- 小さいときに下半身が裸の男性につけられながら、何とか逃げるのができたという子が、それ以来男性不信になり、高校生になって、好きな人ができてなかなか先に進めなくなったり、同じようなケースを聞いてどうしようもなく腹を立てたりしてしまうケースがある。子供が危ないと感じたことについては安全を脅かされると認識するので、丁寧に接しないと先に進めなくなることがある。
- 子ども心の開き方、親による子どもが発言できる環境づくりが大事だと感じた。
- 子どもは基本的に言えないのが現実である。言わなくてもいいよという環境、普段の遊びなどの中から自然と出てくるような環境が大事。また、子どものちょっとした変化に大人が気づきあげることが大事。「言っちゃいけないよ」といわれたこ

とがそのまま重荷になることもある。

- ・犯罪者の親族にマスコミが伺う事例について聞きたい
- ・2、3例程度であるが、きちんとチェックし、誤りを見つけたときはマスコミに対して意見を申し立て、訂正記事を書かせることもある。
- ・被害者と加害者との間の情報交換ができないと聞くが。
- ・警察を仲介に双方の同意が必要である。加害者は被害者に気持ちが伝わるようになるまで努めるしかないだろう。

(2) 防犯ネットワークの課題と今後の取り組み

①情報発信機能の強化

- ・10月15日の防犯研修会についてだが、周知徹底が少なかったと思う。より多く、たくさんの人にいかに協力を呼び掛けて行っていくかが大事である。
- ・(研修会は)あまりに少なく残念だった。その前に開催した時と同様に漠然とした広報であったため不安を感じていたがやはり同じ結果だった。会場がいっぱいになるように進めていくべきである。
- ・1つの団体で何人とお願ひする事も難しいが必要だと思う。
- ・我々は代表としてきているが、下への掘り起こしが大事だろう。役員として来るだけでなく、下の人を引っ張る努力が必要である。
- ・この研修会は一般の参加は可能かというお問い合わせがよくあった。一般的にネーミングは大事であり、また、申し込みを取る形にすると参加意欲につながるだろう。申込制にすることで、「申し込んだから行こう」と思うようになる。

—媒体はどんなものもいいか

- ・広報誌にチラシを挟むのはどうか。裏に申込用紙をつけ、切り取って申し込める形にすることで成功につながるだろう。
- ・テーマを絞って、わかりやすくすると集まると思う。
- ・夏休みを使うなら暗がりがいかに怖いかを知ってもらえるようなものを行ってもいいと思う。見聞きだけでなく、体験することで記憶に残る。
- ・共栄小学校の安全マップの発表を聞いて、良い取り組みだと思ったが、このような取り組みをもっと周知して他のところでも行ってもらえたらと思った。
- ・安全マップは各小学校で1枚ずつ持っており、作成にあたってはPTAが呼びかけて各家庭に白地図を送り、事務局でまとめてから各家庭に配ったり、参観日に渡して帰るときに見てもらったりしている。授業でもと呼びかけているが、授業日数が足りなかったり、指導者不足であったりして難しい。
- ・警察の方にお願ひしてはどうか。
- ・経験のある大人が行うのが必要だと思う。
- ・中高生では、スマートフォン等の情報端末によるゲームサイトでの書き込みで非行やいじめによる被害が多い。管理会社に呼びかけていかないと大変であると感じている。企業責任を取り込んで考えていくべきである。

②関係団体の連携強化

ーほくとくんメールへの登録をぜひお願いしたい。また、横のつながりを図れるように考えており、HPに紹介する方法を考えているところである。

- ・各団体の取り組みを共有できると良いと思う。

(3) 第5回防犯年とワーク会議の議題について

事前にアンケートをお送りするので記入をお願いしたい。